

CSRと環境と未来と

温室効果ガス25%削減目標¹⁾

9月に政府が表明した温室効果ガス2020年排出量削減目標、1990年比25%は、日本政府が世界へ、はじめてまとったような姿勢を示した画期です。

理念にもとづく政策方針は、まず表明し、それから、あらゆる分野の施策を、そこへ収斂させていく、それが当然の手法です。

新たな、科学と工学技術、産業と流通、雇用の創造、生活の核心、教育の新展開など、広範囲なパラダイム変革がはじまりそうです。

どれもが、「望ましい」理想やビジョンではなく、理念にもとづき「実現すべき」方針です。

CSRニュースレター・バックナンバー

- Vol.001 CSRはなぜ必要か
- Vol.002 CSR、ことばの意味を知る
- Vol.003 社会(CSR)マネジメント
- Vol.004 会社とはなにか
- Vol.005 会社の存在理由
- Vol.006 ガバナンスとはなにか
- Vol.007 持続可能性とはなにか①
- Vol.008 持続可能性とはなにか②
- Vol.009 予防措置原則とはなにか
- Vol.010 持続可能性マネジメントの導入
- Vol.011 持続可能性イノベーション
- Vol.012 持続可能性リアライゼーション(本稿)

お問い合わせは

トリプルボトムラインLLP
〒460-0016
名古屋市中区橋1-17-128
TEL052-321-8711
FAX052-321-8712

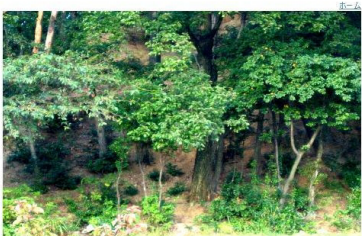
TBLLLP

トリプルボトムラインLLP

Mail: info@tblllp.com

URL: http://tblllp.com

TBLLLP TRIPLE BOTTOM LINE Limited Liability Partnership トリプルボトムライン有限責任事業組合



ディーセンシーのすゝめ

ディーセンシー(desency)は、時と場所と立場(身分)によって、礼儀正しい、上品な、きちんとした、見苦しくない、情み深いなどの意味があります。ありがたさ、いえること、といったら分かりやすいかもしれません。人のこころにそれさえあれば、そう正論をまちがうことがないということです。CSRの時代といわれる今日、このことばを一つこころに持ってほしいものです。きっと、いままで見えなかったものが見えてきます。

Copyright (C) TRIPLE BOTTOM LINE Limited Liability Partnership. All rights reserved.

☆編集室から

CSRニュースレターVol.012をお届けします。次回は2010年2月1日発行予定です。ニュースレター各号は、配布用pdfを用意しています。

ご入用の方は、Mail: info@tblllp.com までご連絡ください。

企業の自立

CSRニュースレター2009・11・01

Vol.012

特集 持続可能性リアライゼーション

持続可能性マネジメントはことばにこだわる

持続可能性マネジメントはことばの意味だけでなく、ことば同士の類似、同義、反義にもこだわります。それは、持続可能性という視点が、論理性をもとめ、ことばのあいまいさを、よしとしないためです。

日本語が非論理的といわれることがありますが、そんなことはありません。というより、いかなる言語も論理的であって日本語も例外ではありません。

持続可能性マネジメントからみるとことばの問題とは、ことばのもつそれぞれの守備範囲が重なり合うという点です。意味が互いに交錯すると、折りにふれて、理解の取り違いが起り、無用な軋轢を引き起こしかねません。

無意識にそうなることが、小さな問題を大きくします。どんな言語でも同じですが、そうした混乱は、あらかじめ整理しておくことで、避けることができます。

「考える」と「思う」は違う

日本語では「思ふ」ということばが、よくつかわれています。ただ無意識につかて、意味をあいまいにしてしまうことがよくあります。ことばの範囲がひろすぎるからです。

思うということばは、「考える」から「感じる」までという、幅のあるレンジをもっています。そしてどちらかというところ「感じる」方向が重みがかかっています。その意味の位置は、そのつどの会話の文脈からきまってきます。

マックスウェーバーは、人の行為は二つの動機をもち、その一つが論理であり、もう一つが感情であるとしています。

今月の学び

「本当は何を言っているのか知らずに意見を言うという事」は、私達にとって極めて普通の事である。言葉というものは恐ろしい。恐ろしいと知るには熟考を要する。

考えるヒント〜小林秀雄〜

ここでは、論理とは「考える」ことであり、感情とは「感じる」ことです。互いに対極に位置しているにもかかわらず、先のように、思うとは考えること、また感じるからです。自分でとくに意識しなければ、ふだん区別ができません。

話し合いは「考え」をいい合うこと

つまりその意味の位置を特定できません。聞いている相手はもつと区別できません。互いに暗黙のうちに理解しようとする気があるだけです。

それがテーマをもつて話し合いをするとき、問題になります。テーマについて述べるのは、考え(考えたこと)ですが、そうした「考え」にもかかわらず、「わたしの意見(感想)ですが」とか、「こう思うのですが」とかいつていると、論理の輪郭が薄くなつてきます。

そこに、無意識の「感じる」が入り込んでくるからです。とくに立場上の優劣関係がある場合、そうなります。

ユリノキ

モクレン科ユリノキ属の落葉高木、大気浄化能力Aの環境樹木です。別名は、チューリップノキ、ハンテンプクなど、花がチューリップ様、葉がTシャツ、半纏にみえます。北米原産、近年、街路樹や公園によくみられる、都会の木です。

「思います」でなく「考えます」という

論理に感情が入り込むのは、優位に立つ人が意見を自分の都合で組み立ててしまうからです。私ごと私見です。意見に「こうした私ごと」が入れば、その時点でもう中立の論理とはいえません。

反対意見がでると憤慨するといった単純な感情反応は、こうした経緯で噴出します。劣位にある人もそれに感応して、無意識に対立を回避しようとしてします。双方で、話し合いはなくなりません。

考えと、この思いや意見・感想などの錯綜は、どんな会社でも学校でも、地域社会でもミニミニでも、日常に起きていることです。ここでは論理でなく感情の支配が強くてしまいます。

ですから、なるべくしにくいときもあります。「そう思います」というのでなく、「こう考えます」ということにします。それだけで、こうした膠着を、だんだんと回避できます。

持続可能性マネジメント

TBLLLP

トリプルボトムラインLLP

「考え」はおおやけ(公共)のもの

考えと感じとを意識的につかいわけ、思いとすることはなるべくつかわないようにすると、軌轢や膠着を回避できるだけでなく、考えの「おおやけ」ということに、意識が向き、「わたくし」とから距離をとるようになります。

「わたしの」つぎつめた考えは「こうです」ということは、「大多数がよいとするはずの」わたしの考えは「こうです」となり、自然と私見を排除していくことになるからです。そして、それがまた、相手にも自然に伝染していきます。

すくなくとも、論理がそのまま輪郭をもち、相手も、無意識に、感情でなく論理に焦点をあてようとするからです。そうした流れは、だれにとつても僥倖です。

「理念」と「ビジョン」は違う

思う、でなく、考えるという視点から、理念とことばに焦点をあててみます。

理念は、理想やビジョン(幻想)と混同されることがありますが、はっきり別のもので、

理念には、対立語がありません。理想やビジョン、空想や夢には、現実という反対語があります。

したがって理想、ビジョンは、現実から乖離し、逃避することとみられても仕方ありませんが、理念はそういうものではありません。

「実現(リアライゼーション)」

理念とは、実現(リアライズ)するものです。対して、理想やビジョン、夢や空想は、かりに実現ということばをつかっても、実際は実現することより、そう想っている事実があることで、よしとしてしまいます。

「望ましい」という表現が、理想、ビジョンなどのことばの本質です。「実現不可能」の代名詞とついでにいいものです。理念はあくまで実現可能なものです。

これからを現実化する

実現とは「対象をこれから現実化する」とことで、いま現在の現実(また、を、そのまま再現すること)ではありません。これからとは、未来のことです。

現実とは、「これまで」のモノゴトのことで、現実的とは、これまでのやり方を踏襲することです。未来とは「これまで」とは別で、「これから」のモノゴトのことです。

未来は、「自ず(おのずから)やってくる」とではありません。「自(みずか)ら」つくっていくことです。自ずと自らも別のことばです。

組織体の理念

組織体にとって(どんな組織体であっても)理念とは、実現すべき最上位の価値です。そして、理念にもつぎ、方針がブレイクダウンされます。

地球温暖化防止という世界共通の課題に對して、「二酸化炭素(90年比)25%削減」という宣言は、こうした方針です。

これに対する各界の反応は、二様です。様々な理由をあげて無理だとする反応と、反対に賛意を表して、計画の具体化をもとめようとする反応です。

足かせということからすると、無理とするのも分らないではありませんが、万人に均等な足かせが、文明を発展させていくこともまた、歴史の事実です。

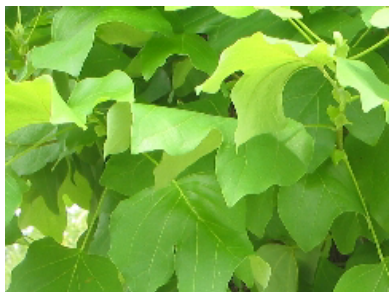
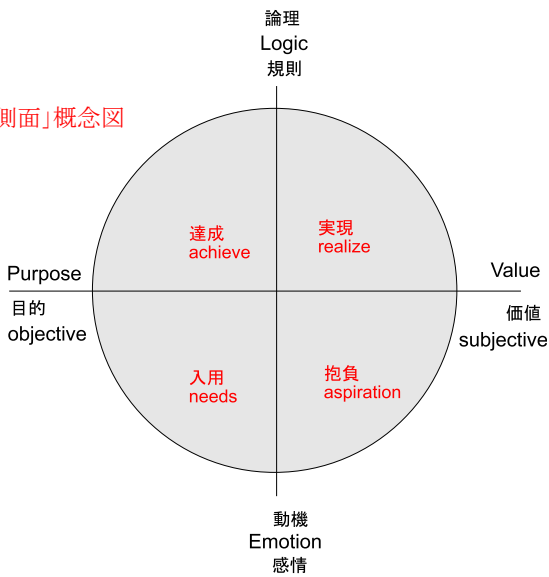
動機と理念

「25%削減宣言」は、この足かせを意識し、「いつかはしなければならぬこと」をためらって、後世により大きな禍根を残してはならない」という理由を付けくわえています。

足かせをクリアし、足かせがかえって動機となることを期待するものですが、そのままでは、動機につながりません。

特集 持続可能性リアライゼーションのつづき

マックス・ヴェーバー「社会的行為の4側面」概念図



ユリノキの葉

ヴェーバーのいうように、動機は、感情に属するものですが、かならず一つの方程式をもつています。それは、「よりよき着地点が分かっている、人は動いていける」というシンプルな命題にほかなりません。使命感です。

そしてその着地点を現実のイメージとして抱くことができるもの、それが理念のもう一つの側面です。

理念の再確認

具体的な理念は、たとえば「消費するエネルギーのすべてを、再生可能なエネルギーとする」というものです。その後には同様に「再生可能なマテリアルとする」ということばもつづきます。

「再生可能エネルギー社会」、「再生可能マテリアル社会」、つまり「再生可能な(資源)社会」です。「持続可能性社会」です。

ちなみに、「低炭素社会」は、理念ではありません。脱炭素社会(多くを原子力エネルギーに依存する)でもありません。それらは、方針の一つもしくは過程にすぎません。多くをソーラーに由来する再生可能エネルギーに依拠する社会だけが、この場合の確かな理念といえるものです。

***企業の自立とは**
企業が社会(当局・政府・行政、地域社会、市場、NPO・NGOなど)に、またその主体性法律・条令・地域慣習・商慣習などに制せられるのでなく、企業が社会をつくる、よき影響をあたえて変革していく、という意志をもって事業を営んでいく姿勢のこと。きたるべき時代(つなげたい、TBL)のコンセプトです。

パラダイムの変革

そうした理念の実現は、いくつパラダイムの変革をもたらしますが、そのうち最大の枠組み変化は、再生可能エネルギーのもつ分散性(非集中性)です。

農業のように、農地の集約化の効率と、分散化の効率とがどこかのレベルで平衡するというセオリーが有効です。それは、副産物として、組織体のエネルギーの自給自足という新しいパラダイムを生みます。

過去でないこと、過去を背負った現在でもないこと、そうした前提のもとにある理念は、かならず未来のどこかに、実現すべきものとして佇立します。

持続可能性マネジメントが、未来を措置するマネジメントである証左です。

SAS2020(2008.06 策定)
持続可能性評価規準(目次)

- 1 ガバナンス、出資者と経営者
- 1.1 組織の概要
- 1.2 理念
- 1.3 ガバナンス体制
- 1.4 ガバナンスコード
- 1.5 財務と業績
- 1.6 事業継続管理
- 1.7 行為規範(コンダクト・コード)
- 2 利用者、消費者、生活者
- 2.1 利用者の安全衛生
- 2.2 品質管理
- 2.3 利用者の抱負(ライフスタイル要請)
- 2.4 研究開発
- 3 就業者(従業員)
- 3.1 デイリーストック
- 3.2 就業者の安全衛生
- 3.3 フレンドリー・フレンドリー
- 3.4 就業者の抱負(ワークスタイル要請)
- 3.5 就業者の職務評価
- 3.6 就業者の経営参画
- 4 地域社会
- 4.1 上下流の協力者、供給者(サプライヤー)
- 4.2 市場と業界
- 4.3 NPO・NGO・メディア
- 4.4 地域社会
- 4.5 世界と無償の行為(フリーアクト)
- 5 地球環境
- 5.1 マテリアルバランスと環境管理
- 5.2 エネルギー
- 5.3 マテリアル(原材料)
- 5.4 水
- 5.5 温室効果ガス
- 5.6 汚染物質・有害物質
- 5.7 廃棄物
- 5.8 生物多様性